CODE LETTER
Citizens towards Overseas Disaster Emergency
2021.3.1 Vol. 67

写真：ハイチの農業技術学校 ETAL で農業を学ぶ若者

Contents

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・1
特集：コロナとこれからの
市民社会に向けて・・・2
プロジェクトレポート・・・・・・・6
CODE 未来基金 NEWS ・・・・・・・10
スタッフ活動記録・今後の予定・・・14
会員・寄付者ご芳名・・・・・・・・15
ご協力のお願い・・・・・・・・・・・16

巻頭言「コロナ禍での『寄り添い』や『つながり』を考える」

CODE は、これまで、さまざまな災害の現場で、支援する側にいて、被災者側との「支え合い・学び合いの実践」を「寄り添い」や「つながり」を大切にし「最後のひとりまで」を掲げた活動を続けてきています。

ところがコロナ禍では、世界中の誰もが被災者側であると同時に支援者側であるという状況になりました。自分が最後のひとりになる可能性もあります。まさに世界中の人が「支え合い・学び合い」をする当事者になったいま、この精神の真意をどのように本領発揮していくのか、「寄り添い」や「つながり」をどのように実施するのか、自分の身を守りながら知恵を絞らなければなりません。

世界中の人が被災者側の当事者となっても、そこには社会でいつも弱い立場に立たされてしまう人、あるいは弱い立場になるかもしれない人たちがいます。コロナに感染した人はもちろん、日本では自粛、海外ではロックダウンという状況の中で仕事がなくなったり、本来の治療が受けられなくなったりなど、広い範囲での影響が出ています。そしてそこには、残念ながら「分断」と「排除」が生まれていることも確かです。この状況で私たちは何ができるのか、改めて原点に戻らなければならないと思います。2021 年 1 月 17 日は阪神・淡路大震災から 26 年、3 月 11 日は東日本大震災から 10 年が経過しようとしていますが、その間に人々が、社会が、どれくらい成長できたのかが問われています。

このようなコロナ禍の中で人間にとって何が大切なのか、ひとりひとりがこれまでとは違う価値観に気づき、人権意識を基盤とする成熟した社会に一歩でも近づき、次世代につないでいけるようになることを期待しつつ、この波を共に乗り越えていけることを心から願います。

（CODE 副代表理事　吉富志津代）

コロナとこれからの市民社会に向けて

CODE は、近畿労働金庫さんとのコラボで「コロナとこれからの市民社会に向けて」と題し、SDGs・若者・災害 / 気候変動という 3 つの視点から新型コロナウイルス感染症によるパンデミックを考える企画を開催しました。3 回シリーズそれぞれでの議論の内容をお届けします。　（報告：吉椿）

■開催概要

● 第 1 回「コロナと SDGs」 2020 年 11 月 22 日（日）
語り手：三輪敦子さん（関西 NGO 協議会代表理事、ヒューライツ大阪所長）

● 第 2 回「コロナと若者」 2020 年 12 月 20 日（日）
語り手：ワン・ワールド・フェスティバル for Youth
矢田七海さん（兵庫高校 1 年生）
黒田瑞穂さん（京都女子高校 3 年生）
アジア協会アジア友の会（アジアユースサミット）
長尾美穂さん（関西外国語大学 3 年生）
CODE 未来基金
金山大輝さん（舞子高校 2 年生）
柳瀬彩花さん（追手門学院大学 2 年生）

● 第 3 回「コロナと災害・気候変動」 2021 年 1 月 16 日（土）
語り手：寺本弘伸さん（日本災害救援ボランティアネットワーク）
伊与田昌慶さん（気候ネットワーク）

主催：CODE 海外災害援助市民センター
共催：近畿労働金庫
関西 NGO 協議会
日本災害救援ボランティアネットワーク
後援：生活協同組合コープこうべ
神戸新聞社

第 1 回「コロナと SDGs」

三輪敦子さんにコロナ禍における人権やジェンダー、SDGs について講演していただきました。SDGs の前文には「誰一人取り残さない」という最も大切な理念が掲げられていますが、コロナによって「取り残されている人たち」がより浮き彫りになったと三輪さんは語りました。また「ウイルスではなく、失業や排除、偏見、不安によって命を奪われている現実がある」とも話されました。

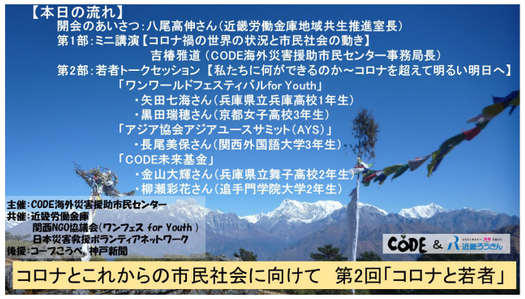
コロナ禍における人権問題では、ニューヨークではエッセンシャルワーカーである黒人やヒスパニックの方がコロナで多く亡くなっていること、女性や子どもへの DV、虐待がより深刻になっていること、ケアワーカーの女性への過度な負担、ジェンダーに基づく暴力など、シャドウ・パンデミックと言われる隠れた問題が世界中で顕在化していることなども報告されました。

このような深刻な問題に対して、三輪さんは「グローバルな問題は、グローバルな対応でしか解決できない。国際協調、国際協力を通じた共存と共生が不可欠である。世界中のすべての人が同じ問題を共有し、影響を受けている今こそ、SDGs の理念と存在意義を再確認すべき。それが羅針盤になる」という言葉で締めくくられました。

閉会のあいさつとして、CODE の村井雅清理事は「私たちは 25 年前の阪神・淡路大震災の後から、『最後のひとり』とは誰なのかということをずっと議論してきて、少しずつそれが見えてきた。『誰一人取り残さない』で言う『誰』とは、どういう人で、どういう状況の人なのかを、活動している私たちが具体的に発信していかなくてはならない。また、私たちはもっとアドボカシーの力をつけていかなくてはならない。25 年を機に振り返って、今一度、何が課題だったのか、今それがどうなっているのかを考えていかなくてはならない」という言葉で、会を終了しました。

内容の濃い三輪さんの講演でしたが、CODE が 2020 年 2 月からコロナ支援を行ってきた中で実感してきたこととまったく同じ言葉も三輪さんから語られました。「私たちがこれまで見えていなかった、見えないことにしてきた、対応してこなかった、もろもろの平時の問題やゆがみがコロナであらわになった」。まさに災害後の被災地で起きていることと同じです。

第 2 回「コロナと若者」



第 2 回は、高校生、大学生たち若者が、コロナ禍で何を感じ、どのように過ごしてきたか、そしてどのように一歩を踏み出し、今、新たに何を考え、何を始めたかなどを語り合いました。年齢も環境も違う高校生、大学生たちが、それぞれ自粛期間中に感じていた「友達家族の厳しい状況に対して何もできない自分へのもどかしさ」「ニュースで見聞きするコロナの状況と自分の身の回りとのギャップ」「高校に入学したが、独りぼっちだった孤独感」「留学を途中でやめざるを得なくなったことによる無力感」「家族に医療従事者がいることの不安や恐怖」など、ネガティブな想いをまず共有しました。

その後、そんな中でもそれぞれが一歩踏み出せたきっかけや新しい日常についても語り合いました。「周りのために動くことで自分も元気になる」「足元を見つめ直してみたら大変な人がいることに気づいた」「家族や友達とのコミュニケーションが大切だ」「当たり前のありがたさに気づいた」「オンラインも便利だけど対面だからこそできることもある」「普段から NGO とつながっておくこと」などのとても大切なキーワードが出てきました。

5 名の若者たちの語る等身大の一つひとつの言葉を聴いて、私たちがいかに「自分の目に入ってくる情報」しか知らないかということや、いかに地域とつながっていないかということ、見えないことは何も起きていないということになってしまうこと、声を挙げることができない人たちに対して時にお節介も必要であること、NGO や市民社会は、困っている人たちと若者をつなぐ役割を担っていることなどを再確認する貴重な機会になりました。私たち大人が、NGO が、市民社会が、若者の声をしっかりと受け止めていかなくてはならないことに気づかされました。

第 3 回「コロナと災害・気候変動」

まず寺本さんからは、気候変動とも関係する 2020 年 7 月豪雨の支援について、コロナ禍で被災地のボランティアが不足する中で Go To トラベルを実施する政策的な矛盾や、コロナ禍の人数制限のため避難所に入れない被災者がいた事例、またコロナ禍で孤立している高齢者と大学生との文通、近年雨の量が増えて水害が多発していることから、気候変動の影響を懸念していることなどを現場の視点からお話しいただきました。

続いて伊与田さんからは、2020 年が観測史上最も暑い年で、過去 20 年で気候災害が 80％以上増加したこと、温暖化と気候災害の関連は近年、科学的に実証されるようになったこと、もっと早く気候変動の対策を行っていればコロナ禍で「避難所か自宅か」などの選択を迫られる必要はなかったこと、温室効果ガスの排出で日本政府の進める石炭火力や原子力のエネルギー政策と気候災害問題との矛盾が指摘されました。

吉椿からは、CODE が武漢などでコロナ支援をする中で見えてきた NGO やボランティアなどの市民が公助の隙間を埋めていたこと、ステイホームだけでは守れない命があることなどをお伝えさせていただきました。

その後のディスカッションでは、気候変動というグローバルな危機の中で、ローカルで災害が起き、復興する前に次の災害が来るという時代に入っていること、コロナ前の社会はそれほどいいのものではなかったこと、コロナで見せつけられた社会の持続不可能性や不正義を今こそ見つめ直し、よりよい社会に転換していくこと、公が市民社会に丸投げしようとする中、市民社会の役割を考えることは公助の役割を問うことになるということなど、非常に重要な視点が議論されました。

参加者との意見交換では、若い人たちに希望を託すというのは無責任で、大人も若い人たちと共に「誰かのせいにするのではなく、一人ひとりが自分のやれることをやる」という姿勢が重要であることも再確認されました。そのためには課題解決につながる本質的な流れを押さえた上で、一人ひとりがやるということ、また、社会を変えるには、根本的な価値観を共有できる人たちが人口の 3％いればいいという意見もありました。

会の最後には、CODE の榛木恵子理事より「国内と海外のテーマは同じで、SDGs がその羅針盤になる。NGO/NPO は、多様なセクターと柔軟な議論をし、時に互いに厳しいことを言い合うことも必要。皆さんと共に市民社会の担い手として歩んでいきたい」との言葉がありました。室﨑代表理事の「気候変動も、コロナも、減災社会も、貧困も、根本は同じである。大局を見て基本に向かって進んでいくことが大切だ」との言葉で会を閉じました。

震災 26 年企画

ポストコロナに向けて、「いま」、1.17 とどう向き合うか？

阪神・淡路大震災から 26 年を迎え、コロナ禍の「いま」改めて 1.17 と向き合うことをテーマにしたオンライン企画を 2021 年 2 月 1 日に開催しました。様々な参加者から投げかけられたメッセージや議論の一部をお伝えします。

震災 26 年企画に寄せて：村井雅清（CODE 理事）

26 年前の 1.17 を軸に、いま、改めてしっかりと 1.17 と向き合うことが大事。本企画で「過去」を振り返るという意味では、1923 年の関東大震災までさかのぼる必要があるだろう。「現在」というのは、阪神・淡路大震災からコロナ禍までの「災間」。「未来」とは、ポストコロナに訪れる社会というのはどういう社会なのかということ。

ボランティア元年の意義は、700 年代の僧侶だった行基の活動や、フランス革命時のアソシエーションにつながる。そもそもこれは今で言うトップダウンの組織ではなく、緩やかな横のつながり・連帯という意味を持っていた。

阪神・淡路大震災 1 年目の「市民と NGO の『防災』国際フォーラム」では 1 日 2 万人が集まり、多彩なテーマで多様な議論を展開した。そこで、多彩な表現からいろいろなことが紡ぎだされたことに意味がある。

コロナ禍の「いま」何がおかしいのか

吉椿雅道（CODE事務局長）海外ではボランティアやNGOがかなり動いて、厳しい人たちを支えていた。ステイホームだけでは救えない命がある。自分たちがいかに地域のことを見えていないかということを感じた。

松田道子（CODE理事／神戸YMCA）コロナ禍で行動が制限され、経済が不安になっていく中で、私たちは小さく小さくさせられている。自分以外の人たちのことをいかに想像し、どう手を差し伸べられるか。KOBEを経験し、いろいろな人とのつながりを知っている私たちが、人と人との壁が分厚くなっている今まさに、手をつなげて広がっていかなければいけない。

西海恵都子（CODE理事／神戸新聞社）阪神・淡路大震災でもコロナでも、未経験の世界にいきなり放り込まれて、この先の想像が全くつかないということに共通点がある。その時、現場で起きていることを丹念にリポートするのがまず一番大事。ただ、コロナでは差別・偏見への懸念から情報を閉じてしまうことが多々ある。現場のリアルがしっかり伝わる報道をするには、現場と丁寧に信頼関係を構築していくことが大事。

宮本匠（CODE副代表理事／兵庫県立大学大学院准教授）2020年7月豪雨では県外からのボランティアが制限されたが、被災地では厳しい状況の人がたくさんいる。JVOADが出したコロナ禍での災害支援に関するガイドラインも「ボランティア自粛」を助長している。その中で「一般ボランティアは行かない方がいいが、専門ボランティアは行ってもいい」とボランティアの区分け・選別が起きていることも、議論の余地がある。

村井：コロナ禍でも自然災害でも、被災者主体と補完性の原理が根本。まず個々の被災者が主体であり、尊重されなければならない。ボランティアは被災者に接して、声を聴き、代弁する。それに対するボトムアップの仕組みがなければ物事は解決しない。

ポストコロナに向けて

大原伸司（熊本県球磨村渡 区長）この間ずっと、ボランティアがもっと来てくれたらという想いでやってきた。被災者の方々は将来への不安など、様々な悩みを抱えている。仮設住宅は閑散としており、孤立が心配。コロナがもう少し落ち着けば、単身高齢者のお宅を回りたい。自分が被災者と被災していない人の架け橋になりたい。被災していない人も、きっかけがあれば行動に移せる。

柳瀬彩花（追手門学院大学2回生）当初は、コロナで困っている人に何かしたいという気持ちもあったが、大きなことをしなければいけないと勝手にハードルを上げていた。それが、足元にいる人を気にかけることであれば私にもできると気づいて、地元の支援団体を訪問した。地域で動きながら、本当に困っている人と頼れる支援団体をつなぐお手伝いをしたい。

村井：身近なところから丁寧にやるというのが、これから私たちに必要なこと。阪神・淡路大震災の時には小学生が「今まであまりにも贅沢していた」「自然をいじめるのやめとこ」と言った。市場経済至上主義の追求は終わりにしなければいけないと、今回改めて感じる。

総括：室﨑益輝（CODE 代表理事）

「自粛」という自分の身を守る保身的な立場から、本当に困っている人がいるのに手を差し伸べようとしない人たちが少なくない。そこに困った人がいれば行くというボランティアの原点に立ち戻らなければいけない。

「ボランティアが行かなくなったから地域が頑張りだした」ということを肯定的にとらえてはいけない。被災地とボランティアが連携してこそ、大きな力になる。そのつながりを作らなければいけない。

コロナ禍でボランティアが活動できなければ、次の巨大災害にも対応できない。コロナ禍をどう乗り切るかをしっかり議論しなければいけない。

自分たちにできることを探し出し、創造性や知恵をどんどん出して新しい可能性を追求しなければいけない。できることはたくさんある。それを大きな輪にするために、周りに声をかけて広げていくことが大切。

寄稿

コロナ禍で知った「つながり」「対話」の大切さ

中川寿子（CODE 理事 / 生活協同組合コープこうべ常勤理事）

2020 年は私の所属するコープこうべにとって、コロナ、コロナで明け暮れた 1 年だった。さまざまな試行錯誤を通して「つながりがあらゆる課題解決のカギになる」ということを学んだ。

生協は、人と人との顔の見える関係を基盤とし、助け合いによってくらしの課題解決を行ってきた組織だ。今回のコロナ禍では、集まったりふれあったりが禁じられ、得意としていた活動スタイルが生かせなくなってしまった。

「困っている人の役に立ちたいけれど、感染するのもさせるのも怖い」。一歩踏み出すことに逡巡している組合員に対し、コープこうべは有効なメッセージを出せないでいた。

「なにかを始めなければ」という気運が高まった 5 月、「ハート基金」（自然災害発生時にすみやかに活用できるよう、組合員の募金をプールした基金）からの拠出金で食品を調達し、日ごろつながりのある団体を通じて兵庫・大阪の困っている方に届けることにした。

そのうち、「困っている仲間のために何かしたい」という学生から申し出があり、大学内での食品配布が実現したり、食品メーカーからおせち料理の提供を受け、ひとり親家庭支援や年越しの炊き出し活動に活用してもらったりと、新たな取り組みが次々に生まれた。

学生やひとり親家庭の経済事情も、路上でくらす人の問題も、正直なところコロナ以前は、コープとしてのかかわりを想像してみる力に欠けていたと思う。見えないハードルを越えて一歩踏み出せたのは、「つながり」のおかげだ。

組合員や職員のもとに、コープ単独では出会えなかった人から「ありがとう」の言葉が届く。手紙の行間から相手のくらしの現実を知り、次にコープができることを考えてみる。そんな循環が生まれつつあるように思う。

組織を「外」に開いていくことで人が育ち、「内」が充実する。「つながる力」を磨くことは、組織にとっても大切だ。

CODE は新型コロナウイルス感染拡大が始まった当初から、「新しい感染症によって、平素から厳しい状況に置かれている人たちが、より厳しい状況に追いやられる」と見抜き、世界の NGO とつながって行動をおこしてきた。ポストコロナの世界観を多くの人と共有していくには、「対話」がいっそう重要になってくる。3 回にわたって開催された「コロナとこれからの市民社会に向けて～ SDGs・若者・災害の視点から～」で得たものについてさまざまな人と言葉を交わし、次に生かしていきたい。

関西学院大学の学生グループと連携した活動

フードパントリーを行っている NPO 法人ケアット

新型コロナウイルス感染症支援プロジェクト
コミュニティ・キッチン＆ガーデニング in フィリピン

新型コロナウイルス感染症の影響が世界的に広がる中、フィリピン・バンタヤン島のサンタフェ町の漁村で支援プロジェクト「コミュニティ・キッチン＆ガーデニング」を開始しました。CODE は 2013 年台風ヨランダの復興支援を、現地の住民アソシエーションとともに取り組んできました。本プロジェクトでは、そのアソシエーションによる食を通じた助け合いの活動をバックアップしています。

コロナ禍のサンタフェ町の現状

フィリピンでは、感染の状況に応じて生活や経済活動に対する制限が 4 段階あり、地域ごとに適用されます。2021 年 2 月時点では、サンタフェ町を含む大部分の地域は最も制限が緩和された段階である MGCQ (Modified General Community Quarantine) となっています。制限の緩和は、ロックダウンによる経済的な困窮や損失を懸念しての措置とも言えます。

これまで観光業が制限されていたことで、サンタフェ町の漁師たちはレストランや宿泊施設への魚の販売が影響を受けたり、ドライバー業や建設業の仕事を失ったりしていました。現在、国内旅行者向けの観光業は再開していますが、旅行者は健康証明書などの書類の提示が必要となっています。また、教会でのミサなど、コミュニティ内の活動は人数制限を設けて行われています。

みんなでとる食事

ポオックとオコイ 2 つのアソシエーションで、それぞれ 3 つのグループに分かれて「コミュニティ・キッチン」を実施しました。ポオック地区では 48 世帯、オコイ地区では 35 世帯が参加しました。豆の煮ものや野菜スープ、魚肉団子など、グループごとのメニューを調理し、長机を囲みながらみんなで味わいました。現地 NGO のジョジョさんいわく、今回のように家族以外の地域住民で集まって食事をする機会は、誕生日や村のお祭り、冠婚葬祭などを除いては、普段はあまりないのだそうです。人と人との距離を隔ててしまうコロナ禍ですが、今回のプロジェクトをきっかけとして、アソシエーションのメンバーによる新しい経験やつながりが生み出されています。

今後、「キッチン」の活動を引き続き実施するとともに、野菜を育てる「ガーデニング」の活動も開始する予定です。

参加したメンバーからのメッセージ

- コロナで今は仕事が大変厳しい状況なので、今回の支援はとてもありがたいです。
- 子どもたちや家族に栄養のある魚や野菜を食べさせられてうれしいです。世界的なパンデミックでみんな大変な中、支援をしてくれたことに感謝しています。

コロナ禍のフィリピン —NGO FIDEC のジョジョさんからのレポート

ワクチン接種の動向

補償に関する法律がまだ整っていないため、ワクチンの接種開始が遅れています。ワクチンによる副作用が出た場合に製造・供給業者が責任を負えないとのことから、国による補償が期待されています。また、中国企業によるワクチン提供が計画されていますが、他の国での使用事例から、その有効性を疑問視する声もあります。さらに、国内でのワクチン承認前に大統領の警護隊員がワクチンを接種していたことが明らかになり、密輸ワクチンではないかとの疑惑も生じています。

先住民「ルマド族」への影響

セブ市にあるサンカルロス大学で、ルマド族の学生が現地警察に強制的に「保護」されるという事件がありました。ルマド族はミンダナオ地域の先住民ですが、近年ルマド族の学校への襲撃事件が起きたことなどから、安全のために一部の学生は他地域の大学に「疎開」していました。そこでコロナの影響を受け、本来は課程を終えて地元に帰るはずだったルマド族の学生たちは「疎開」先の大学に留まらざるを得なくなっていました。サンカルロス大学と、この「疎開」を主導するカトリック教会は共同声明で「学生たちは『保護』など必要としていない」としており、人権保護団体も学生たちの解放を訴えています。

寄稿 企業の SDGs 推進の取り組み —レインウェアを寄付いただきました！

堀之内有希（CODE 理事／田中産業株式会社）

この度、CODE を通じて田中産業株式会社の旧式商品であるゴアテックス製のレインウェア 300 着をフィリピン・バンタヤン島に寄付させていただきました。改めて、今回寄付先とつないでくださる等、ご支援いただきました CODE スタッフの吉椿様、立部様に御礼申し上げます。

田中産業は創業 66 年の農業資材メーカーとして、穀物類の収穫・貯蓄用の大袋をはじめ農作業着など多くの商品を開発、販売してまいりました。特に高機能素材であるゴアテックスを搭載したレインウェアを農業界で唯一製造・販売するなど、古くから素材にこだわったものづくりを行っております。

昨年 4 月にはゴアテックスウェアの新たなブランド「Bloom（ブルーム）」を立ち上げ、事業を通して SDGs や社会課題の解決、価値の創造に取り組んでまいりました。その一環として、旧式のゴアテックスウェアを活かした活動ができないかと CODE 吉椿様に相談させていただき、今回の取り組みにつなげることができました。

現地の漁師からは「雨期の時期や漁をする時にとても助かる。支援に大変感謝している」とのお声もいただき、SDGs17 の目標の 1 番目、貧困をなくすゴールへ第 1 歩を踏み出せたことを実感しております。

今回の取り組みをきっかけに、私自身も企業人としてできる活動を自ら社内で提案するとともに、企業が事業を通して SDGs に取り組むことを当たり前にするべく、今後もさまざまな事業、パートナー企業を巻き込んだ取り組みをしていきたいと思います。

ご寄付いただいたレインウェア（上）
ウェアを着用したバンタヤン島の漁師たち（右）

田中産業株式会社様、堀之内理事、ありがとうございました！

新型コロナウイルス感染症支援プロジェクト 国際アライアンス IACCR の近況

CODE の新型コロナ感染症支援は、2020 年 2 月に中国・武漢の支援から始まり、その後中国の NGO や大阪大学渥美公秀教授らとともに国際アライアンス IACCR (International Alliance for COVID-19 Community Response) を立ち上げ、世界各国・地域の市民たちと問題意識や知見を共有してきました。今回は渥美教授より、コロナ禍での見解を寄稿いただきました。また、中国のカウンターパート張国遠さんより、IACCR の近況や中国の現在の状況についてレポートいただきました。

寄稿

コロナ禍で変わること、変わらないこと、変えてはならないこと

渥美公秀
（大阪大学人間科学部教授／日本災害救援ボランティアネットワーク理事長）

新型コロナウイルス感染症が知られるようになった初期の段階で、その蔓延（コロナ禍）を災害だと受け止め、即座に救援活動を展開された CODE 関係者の皆様には、改めて心より敬意を表します。私ども日本災害救援ボランティアネットワークと大阪大学の研究室では、共通の友人であります四川省の張国遠さんを中心とする国際ネットワーク IACCR の開設に吉椿事務局長とともに参加させて頂き、その運営に一緒に携わらせて頂いて参りました。現在では、本拠地成都の外に、データの管理や救援活動の拠点として KOBE 支部を開設し運営を一緒に模索しているところです。

コロナ禍は、どこでも、誰にでも被害がおよぶ新しいタイプの災害です。場所を選ばす、人を選ばずとなると、気候変動とも似ていると指摘されます。どちらも日本ではなかなか災害と認識されてこなかったように思います。実際、災害といえば、特定の場所で起こり、特定の人々を苦しめるものというイメージがありました。だから、これまで、遠くても救援に駆けつけ、救援から復興までの長い時間寄り添っていくことを続けてきました。しかし、コロナ禍をきっかけに多くの方々がオンライン会議を経験するようになると、もはや遠くであっても、誰とでも、いつでも簡単につながれるような気がしてきます。コロナ禍や気候変動といった新しい災害には新しい対応が必要になってくるでしょうか？

もちろん、どこでも誰にでも起こる災害ですから、地球規模での対応が必要でしょうし、それを災害と定義するための議論も必要なのかもしれません。また、どこでも誰とでもいつでももっと手軽につながれる技術も開発されてくるでしょう。しかし、地球規模の大きな対応がなされても、また、災害の定義がどうなろうと、どんな技術革新があろうと、残念ながら変わらないことがあると思います。

コロナ禍がどこでも起こるといわれても、その被害はどこでも同じということではない。コロナ禍が誰にでも起こるといわれても、誰もが同じく被害を受けるということではない。被害は、弱くされ、声を上げにくくされている特定の人々を襲い、特定の場所に集中する。このことは残念ながら変わらないと思えるのです。いやコロナ禍によってよりひどくなっています。さらに、コロナ後の世界は、これまでの社会に戻ろうとするエネルギーが爆発するでしょうから、もっとひどくなると考えた方がよさそうです。

コロナ禍で変わらないこと、変えてはならないことはたくさんあります。私自身は、「どこにでも行って、誰にでもずっと寄り添っていく」という CODE がこれまで実践されてきたことこそ変えてはならないことだと思います。その姿勢を私たちの身の回りにさらに広げていって頂きたいと願っています。

IACCR は、現在、設立当初の活発な情報交換を終え安定期に入り、正直なところ、少し停滞気味です。私自身にできることは極めて限られていますが、吉椿事務局長にご一緒させて頂いて、KOBE 支部から議論を盛り上げ、具体的な活動へと移行していきたいと思います。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

寄稿

IACCR の近況と中国・武漢のいま

張国遠（新安世紀教育安全科技研究院院長／ NGO 備災センター代表）

IACCR の近況

IACCR ではこれまで、18 の国と地域が参加し、16 回のオンライン国際会議を開催してきました（2021 年 2 月 10 日時点）。会議はのべ 30 万人以上が視聴しました。関連して、コロナと SDGs、若者たちをテーマにしたフォーラムも開催しました。また、IACCR 事務局である新安世紀教育安全科技研究院（NCIESST）を中心に、情報発信として各国のコロナの状況のレポート作成や、支援活動のための基準書の翻訳も行いました。今後、CODE や大阪大学渥美公秀教授との協働で、「コミュニティガバナンスとソーシャルセクターのコロナ対応」に関する IACCR の国際研修コースも計画したいと考えています。

武漢の現状

2021 年 2 月 10 日現在、武漢での新規感染例は 0 件で、これまでの累計感染者数は 50,340 人、累計回復者数は 46,471 人、死者は 3,869 人です。

武漢市は、感染症の治療体制及びビッグデータに基づく管理体制を構築しています。また、2 級以上のすべての医療機関には PCR 検査室を設置しており、1 日 1 万人規模の検査基地と国家公共検査プラットフォームによる地域を超えた支援能力強化を計画しています。病院や公共衛生医学センターといった公衆衛生のインフラ整備プロジェクトも進められています。武漢の医療機関でコロナ対策に関する経験を蓄積したことから、河北省でコロナが爆発的に感染した初期には、武漢市は CT スキャン技術や遠隔診断システムを装備した医療車両を走らせるなど、河北省のコロナ対策を支援しました。

武漢の観光産業は完全に回復し、経済基盤が安定してきました。2020 年、四半期の武漢の域内 GDP は 40.5％減少しましたが、現在は 4.7％の減少まで回復しています。観光収入も 2020 年 10 月 1 日～ 8 日の期間で、前年同期の 83％に回復しました。

中国の現状

2021 年 2 月 10 現在、中国国内での新規感染例は 1,543 件、外国から入った例は 4,832 件です。累計感染者は 101,427 人、累計回復者 95,050 人、累計死者 4,834 人です。状況が深刻なのは、香港特別行政区で 499 件、黒竜江省 273 件、河北省 188 件、吉林省 181 件、上海 121 件で、高リスクのエリアが 6、中リスクのエリアが 16 あります。

検査の費用は、複数回の概算を経て、1 人 1 回最低 15 元(約 250 円)という低価格に引き下げられました。PCR 検査のサンプル採取を 10 人 1 組で行い、大規模に検査を実施することで、検査費用の負担を下げ、早期に検査結果を出すことができます。

重点的な人たちへのワクチン接種を進めており、2 月 9 日現在、全国で累計 4,052 万回のワクチン接種が報告されています。感染症の専門家によると、一般的に初回の接種後に 60 ～ 70％の抗体が表れ、2 回目の接種から 14 日後に 90％の抗体が表れます。ただし、ワクチン接種後、抗体ができるまでに少なくとも 2 ～ 3 週間かかり、ワクチン注射から抗体ができるまでの間に感染リスクがあるので、その間の感染防止に注意が必要です。

感染症の予防措置の効果が表れ、2021 年 2 月に入り、全国で 3 日連続新規感染者や疑いのある例は確認されておらず、15 日連続で感染例は減少しています。ただ、春節期間中はエリアごとのリスクの度合いに従って、移動せずに「その場で年越し」することとなりました。

IACCR の見解

感染抑え込みのためには、コミュニティでの予防とコントロールが重要です。中国に代表される人口密集型の国は、コミュニティの感染防止の重要性を十分に認識しており、ビッグデータと AI 技術を最大限活用したオンライン化、スマート化による管理を行い、感染防止システムを実現しています。

新型コロナウイルス感染症への理解が深まるにつれて、各国の感染防止戦略はより洗練されてきました。各国の感染防止策は互いに参考にできますが、一方で、それぞれの国の事情、目標、価値観の違いがあり、完全に真似することはできないと考えています。

パンデミックは、各国の経済に大きな影響を及ぼし、現在の世界のありようを変えるでしょう。ワクチンが一部の国で大規模に接種されても、世界の発展途上国と先進国は依然として次の爆発的な感染の可能性に直面しています。この状況は世界中の国々、特に貧しい国々に巨大な脅威とリスクをもたらしました。大多数の発展途上国では、このような感染症の長期的な影響に対応する資源と資金が不足しています。経済的な影響、金融危機、前例のない失業、インフレ率の高騰、貧困の増加などのリスクもあります。政府レベルでは、内紛と政情不安が主な問題で、経済状況をさらに悪化させることが懸念されます。

CODE 未来基金 NEWS

「世界のステイホームから」台湾からの学び

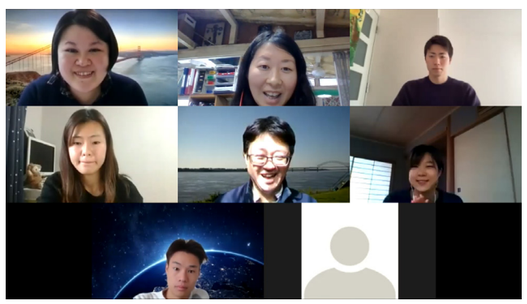
オンラインで海外のコロナ禍の様子を学ぶ企画「世界のステイホームから」。今回は台湾出身の李フシンさん（京都大学防災研究所）を講師に迎え、世界的にもコロナ対策に成功していると言われる台湾について、政府の政策や、コミュニティの対応、市民社会の動きなどについてお話しいただきました。

台湾では、緊急事態宣言もロックダウンもありませんでした。2020年12月14日時点で累計感染者数は740人で、これは12月17日の東京の1日の感染者822名よりも少ない数字です。死者は7名。感染者のピークは2020年3月でした。台湾では2019年12月30日に中国・武漢での新型ウイルス発見を把握しており、早くから対応に着手していました。これは、もともと中国との敵対関係があるため、2019年末の大統領選挙に備えて中国からの情報に敏感になっていたことが要因として挙げられます。

今回のコロナ対策では、2004年のSARSの経験が反映されています。SARSの時に社会がパニックになったのは、台湾にとってトラウマでした。SARSでは中央政府と地方政府の政策の不一致があったことから、コロナでは中央の指揮センターが決定権を持つように集約されました。指揮センターのトップの丁寧な記者会見や、個人のSNSを使った情報発信は注目を集めました。

SARSの時にできたコミュニティの防疫ネットワークが、コロナ対策でも活用されました。地域リーダーである村長や里長が、地域内の在宅隔離者の情報を役所から取得し、隔離者の健康状況の確認や生活支援にあたりました。また、偏見や風評が起きないように地域住民とのコミュニケーションにも気を払いました。

コミュニティ内では、感染リスクの高い人への支援や啓発活動などでボトムアップの取り組みがありました。ある地域では、コロナ以前は高齢者が集会所に集まって食事をしていましたが、それができなくなってしまったため、地域のボランティアや自主防災組織が高齢者にお弁当を届けて、同時に体調を気遣ったり感染対策のアドバイスをしたりしました。また別の地域では、自主防災組織のメンバーがマスクや消毒用アルコールを調達したり、検疫対象者の自宅付近を消毒したりしました。これらは、何も新しいことではなく、もともと地域でやっていたことをコロナ禍でもやっているということです。



市民社会は、コロナをきっかけにSNSを通じて「理想的な社会」を構築しようとしています。SNSでのマスク譲り合い運動や、海外在住の台湾人による自助グループ立ち上げなどが行われました。また、台湾政府のTaiwan can helpキャンペーンと連動して大規模なクラウドファンディングを行い、台湾はSARSの経験を活かして各国に支援できることを世界にアピールしました。これまで台湾では、若者が民主的かつ平等な社会の実現、格差是正などをめざして、投票行動や寄付、ボランティア、SNSでの発信などに取り組んできました。コロナ対策の成功は、台湾の「理想的な社会」を実現した成果として評価できます。かつては市民の政府に対する信頼は弱かったのですが、コロナ対策で政府は積極的かつ真摯に市民とコミュニケーションをとり、不安や混乱を解消しています。これは、2019年の選挙を通じて民進党が市民の意識や求めているものをつかんでいたことも影響しています。

台湾は長年国際社会で孤立し、「国」ではなく「声なき地域」とされてきました。コロナ対策の成功や、Taiwan can helpで海外の国へ手を差し伸べられたことによって、台湾社会は自信を持つことができ、台湾のアイデンティティ確立に寄与しています。

お話を聴いて…
金澤諒平さん（神戸学院大学３回生）

台湾でなぜこれほどまでに感染拡大が抑えられたのか。その理由は、2004年のSARSの経験があったからだそうです。台湾はSARSの感染を最も遅く終息させた国としての反省がありました。しっかりと過去の反省を活かした結果が今に結びついているのだと考えます。政府と国民との距離が近いことも感染を抑えた要因ではないかと感じました。一方、日本ではますます感染が拡大し再び緊急事態宣言やロックダウンをしなければならない状態まできています。未知のウイルスに対して私達ができることはないか。今何をすべきなのか。優先事項を自分の頭で考えて行動することが大事だと、この話し合いで気づくことができました。

高校生インターン西本さんとの学び合い

2020年6月から12月にかけて、神戸市立神港橘高校の「通年型インターンシップ」の授業を通じて、西本葵さんがCODEでインターンシップを行いました。週1回CODEの事務所に来て、事務局での広報業務やイベント参加などを通じて、ボランティアやコロナ禍の問題について学びました。インターンの活動報告会の様子をお届けします。

私は看護師をめざしています。寄り添いや支えるという点で、看護と支援活動は結びつくと感じ、インターン先にCODEを選びました。CODEはコロナの支援活動も行っているので、少しでも多く知識をつけて将来に活かしていきたいと思いました。

災害看護支援機構の事務局の方にインタビューさせていただける機会がありました。「一人の人間としてどのような暮らしができるか、一人ひとりに目を向ける」「病気を治す、退院できるまで支える。それだけではなく、食品の衛生や、環境の支援など暮らし全般を見ることが大事」という言葉が印象的でした。

CODEのコロナ支援の報告会では、フィリピン、インドネシアやバングラデシュの話を聴きましたが、私はそれまでそれらの地域の情報を知りませんでした。世界で起こっていることを、知っているようで知らない人が多いことが問題だと思いました。どんな人が、どんなことで困っているかなど、詳しく知る必要があります。そのためには、情報共有し合うことが大切だと思いました。それによって、課題の解決につながると思います。

自分自身は自粛期間中に、規則正しい生活を送ることの難しさと、計画的に勉強する習慣が身についていないことを実感しました。また、部活ができないことや、友達に会えない、外に出られないことに対してストレスがたまっていました。私の学校ではオンライン授業がなかったので、勉強時間の差への不安もありました。コロナによって、「もしかしたら感染してしまうかも」と、周りのことに敏感になりました。今までできていたことができない。コロナ鬱の根元は、単に外出できないことではなく「当たり前が当たり前ではなくなってしまったストレスや恐怖」からきていると思います。

一方、自粛生活を送ることで、気づかされたこともあります。私たちの思っていた当たり前は実は当たり前ではありませんでした。一つひとつのことが実はとても価値のあることで、それに気づかず当たり前だと思って毎日を過ごしていたんだと気づきました。日本の自粛生活は海外のロックダウンと比べると緩い方だと言われます。日本で、以前よりも不便な生活を強いられているとはいえ、当たり前にできている裏では、感染リスクを背負いながらも働いてくれている多くの人の支えがあって、それがあるからこそ成り立っていると言えると思います。

日本では、感染が自業自得と考えている人の割合が高いという調査結果も出ています。このような日本の悪い風潮や、医療従事者へのコロナ差別などを変えるべきだと思います。一人ひとりが支え合いの心を持つことで、コロナ禍の世の中もよりよくなると思います。

インターンシップを通じて、いろいろな人とコミュニケーションをとることや、知らなかった情報を知ること、様々な視点で物事を考えることができると思いました。最初はスタッフの人の話が難しくて、わからなかったり、意見を求められても困ってしまうこともありました。しかし、一緒に活動することで、徐々に自分でわからないことを調べ、自分なりの提案をしようという自主性や問題意識が芽生えたと思います。インターンシップで学んだことを、今後も忘れず活かしていきたいです。

Q. インターン中に聞いた話で印象に残っているものは？
A. 中国・武漢で、コロナ禍で3タイプの心のケアがあるという話が印象的でした。重篤な症状へのケアは専門家、感情的なケアはソーシャルワーカー、孤独感へのケアはボランティアがやるという話です。どんな状況でもどんな立場でもやれることがあるということや、自分の足元を見るということを学びました。

Q. インターンをやっていて楽しかったことは？
A. 私はあまり自分の意見を言えないタイプなのですが、吉椿さんに質問された時に、自分の意思を持ってしっかり意見を伝えることができた時が一番嬉しかったです。

Q. インターンに来た当初、わからないと思ったことは？
A. 最初はほとんど知らないことばかりでした。でも、インターンでお話を聞く毎に、考えたことを自分なりにワードにまとめて振り返りをしていたので、少しずつ理解はできるようになったかなと思います。

Q. 以前よりも気に留めるようになったことはある？
A. 以前はコロナのことを深いところまで知ろうという気持ちになれませんでした。インターンを通じて、テレビでコロナや災害のニュースに興味を持ったり、ニュースを見るだけではなく、自分で調べてもう少し深く知ろうという気持ちになることが多くなったと思います。

Q. どんな人にインターン先としてCODEを勧めたい？
A. ボランティアに興味がある人や、私のように医療関係に進みたい人にも「支える」という部分で結びつくと思うので、そういうことに興味のある人に勧めたいです。

Q. これからの抱負をお願いします！
A. インターンシップをする前と後では、自分の気持ちや考え方が変わってきたので、すごくいい経験になりました。これで終わるのではなく、今後も自分の考えをしっかり持ったり、他の人と共有したり、自主的に行動していきたいと思います。ここで学んだことを看護でも活かしていけるように頑張りたいです。

デイキャンプ in 六甲山

CODE 未来基金の企画として六甲山でのデイキャンプを開催し、大学生・大学院生 5 名が参加しました。森を歩きながら、六甲山の歴史や山の文化、災害との関係について学んだり、自分たちで火起こしをして昼食を作り、参加者同士の交流を深めたり、関心のあるテーマや、今後やってみたいことなどについて意見交換をしたりと、とても充実した時間となりました。

参加者した学生の皆さんの感想とともにお届けします。

参加者

- 金澤諒平さん（神戸学院大学 3 年生）
- 塩井杏奈さん（大阪大学大学院博士前期課程 1 年生）
- 原田理央さん（武庫川女子大学 4 年生）
- 柳瀬彩花さん（追手門学院大学 3 年生）
- 山村太一さん（神戸学院大学 2 年生）
- スタッフ　吉椿、立部

山歩き ～六甲山の歴史・文化・災害を学ぶ～

» 山を歩きながら吉椿さんの山林の説明を聞いて、私はこれまで日本の山林に対してあまり意識を向けられておらず、正しい知識を持っていなかったことに気付きました。人間の都合や異常気象によって日本の山林や里山の状態は悪化しており、上手く循環して人間と自然が共存する生活で成り立っていたものが、現在は壊れていることを実感しました。

» 有馬温泉周辺や六甲山を散策してみて感じたことは、地元についてまだまだ知らないことがあり、新たな発見がたくさんあったことです。

昼食作り ～火起こしから自分たちで～

» 火を起こすのに苦労し、普段の当たり前が当たり前ではないことを認識させられました。普段の生活がいかに恵まれているかを感じることができ感謝の気持ちが芽生えました。

» そもそも、私はライターかチャッカマンで起こすものとばかり考えていたので、「まさかそこからするの！」と衝撃でした。

» 野外で食べる手作りご飯は本当に美味しかったです。

意見交換 ～みんなの関心とこれからやりたいこと～

» 関心のある分野が明確である同世代の人たちと語り合い、充実した時間を過ごすことができました。心から楽しかったです。これからも意見を出し合い、それぞれのやりたいことを形にしていきたいです。

» コロナ禍でリモートのやりとりが続く中、現地に足を運んで自分の目で見て確かめることの大切さを身に染みて感じました。今は興味のあることの知識を貯め、コロナウイルスが終息したらフィールドワークがスムーズにできるように前向きに取り組んでいきたいと考えています。

» 今回のデイキャンプで終わりではなく、また集まって何か社会に貢献できるようなことをしたと感じました。コロナ禍で、難しいとはいえ何もできないわけではない。裏を返せば、コロナ禍だからこそできることもあるかもしれない。こういった事を、またみんなで話し合いたいと思います。

寄稿

足元を見直して気づいたこと ～コロナ禍での身近な取り組み～

柳瀬彩花（追手門学院大学地域創造学部 2 回生）

CODE 未来基金の仲間である柳瀬彩花さんは、コロナ禍で困っている人のために自分にできることがあるということに気づき、身近にできることを始めています。柳瀬さんから、取り組みを紹介していただきました。

私は、高校 2 年生の秋頃から CODE とつながりがあり、現在もイベントの参加やブースの出店などで関わっています。2019 年 3 月には、第 5 回日中 NGO・ボランティア研修交流事業に参加させていただきました。

はじめに、去年の春から現在までのコロナ禍での私の取り組みについて紹介します。まず、去年の春学期は大学の授業が完全にオンラインになり外出を自粛していましたが、生活に困るほどコロナの影響を感じていませんでした。また、大学の友人に話を聞いても私と同様の状況でした。

そんな中、私は CODE の未来基金で中国に行ってやってみたいことを思いつき、吉椿さんのもとへ相談に行きました。そこで、吉椿さんからは「現在中国に行くことはできないため、足元のことを知るのはどうだろう」「地域にこぼれ落ちている人がいるはず」というお話がありました。それをきっかけに、家のすぐ近くに住んでいる人の中に困っている人がいるかもしれないことに気づき、私は地域に目を向けるようになりました。

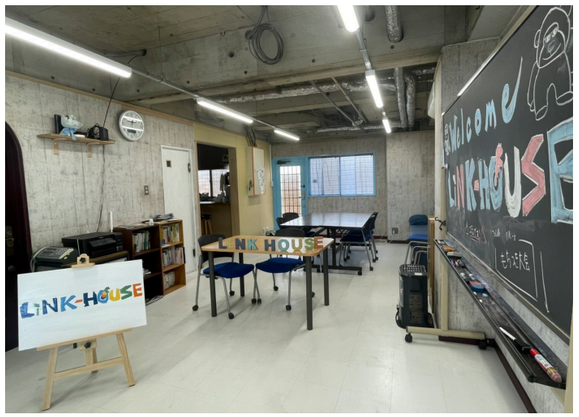
その後、私の地元の社会福祉協議会へ行って私自身にできることを相談したり、地域の高齢者の生活支援を行っている NPO 団体でボランティア登録をしたりしました。その中で気になることが出てきます。社会福祉協議会からは「掲示板には情報を載せているが、なかなか地域の方の困り事と社会福祉協議会の存在を繋げるのが難しい」、NPO 団体からは

右から 6 番目が柳瀬さん
（第 5 回日中 NGO・ボランティア研修交流事業にて）

「コロナの影響もあるが、ここに来ている要望はあまり多くない」ということを伺いました。そこで私は、2 つの団体はあまり積極的に地域の要望を見つけようとしていないのではと感じ、頼れる団体の存在すら知らず本当に困っている人がいるはずだと考えました。さらに、私自身が「地域で本当に困っている人と頼れる団体を繋げる役割になれるのでは」と思うようになりました。

次に、これからのことについて紹介します。まず、大阪府高槻市に知り合いが運営しているシェアハウスがあり、その 1 階部分は誰でも自由に出入りできるように開放されています。そこでこれまで何度かイベントを開催しており、コロナの感染拡大が落ち着いたら再びイベントを開催していきたいと思っています。そして、そのシェアハウスの周辺地域の方たちと顔の分かる関係をつくってから、買い物ボランティアを始めようと考えています。買い物ボランティアとは、買い物の付き添いをして商品を探したり荷物を持ったり、お使いのように商品を買いに行ったりします。買い物ボランティアを行うことによって、日々の困りごとや要望を聞き出せる機会になるのではと思います。その中で何かサポートが必要な方が出てきた場合は、私が頼れる団体を探し、紹介をすることもできます。

また、地元の NPO 団体では春からインターンを開始します。そこで、私自身の地元の「地域」でできることを模索していきます。



これから活動したいと考えているシェアハウス

スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録	
9/29	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「CODE について」で講義（立部）
9/30	NGO ことはじめで講義（村井理事）
10/6	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「日本の災害復興支援活動」で講義（頼政さん）
10/9	龍谷大学「いのちを守る智恵」で講義（吉椿）
10/13	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「災害とジェンダー」で講義（斉藤さん）
10/14	震災対策技術展「SDGs と防災」で講演 (吉椿)
10/19	神港橘高校タウンミーティング「被災地 KOBE から世界へ」で講演（山内優さん、吉椿）
10/20	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「寄り添いとつながり」で講義（吉椿）
10/22	CODE 寺子屋「気候変動と災害」（気候ネットワーク伊与田昌慶さん）を開催（村井理事、吉椿、立部）
10/24	ヒューライツ大阪人権かたりば「最後のひとりまで」で講演（吉椿、村井理事）
10/27	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「異文化理解と援助」で講義（吉椿）
11/9	舞子高校環境防災科「災害と人間」で講演（吉椿）
11/10	フィランソロピー・CSR リンクアップフォーラム「コロナ禍における世界との学び合い」で講演（吉椿） 神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「海外の復興制度」で講義（斉藤さん）
11/13	国際アライアンス「IACCR」KOBE ブランチの勉強会（渥美教授、吉椿、立部）
11/17	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「NGO と働き方」の講義（立部）
11/19	神戸大学平和構築論 A「市民によるムスリム地域における災害救援～阪神淡路大震災からの学び～」（村井理事）
11/22	「コロナとこれからの市民社会に向けて」第 1 回コロナと SDGs を開催（村井理事、吉椿、立部）
11/24	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「国内外の復興支援活動の比較」で講義（立部）
11/29	未来基金デイキャンプを開催（柳瀬さん、原田さん、塩井さん、金澤さん、山村さん、吉椿、立部）
12/1	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「平時の地域防災」で講義（頼政さん）
12/8	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱ「災害と貧困」で講義（吉椿）
12/13	コープこうべ「平和を願う集い」でレーズンの委託販売
12/14	CODE 理事会 大阪大谷大学国際協力論 B で講義（吉椿）
12/15	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（斎藤さん）
12/18	未来基金「世界のステイホームから～台湾の事例」を開催（李フシンさん）（宮本副代表、吉椿、立部）
12/20	「コロナとこれからの市民社会」第 2 回コロナと若者（ワンフェス forYouth）を開催（柳瀬さん、吉椿、立部）
12/21	関西国際大学「国際防災協力」で講義（吉椿）
12/22	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
12/25	事務所大掃除
12/26	全国中学生高校生防災会議で講演（吉椿）
2021 年	
1/6	龍谷大学「国際協力論」で講義（吉椿）
1/16	「コロナとこれからの市民社会」第 3 回コロナと災害･気候変動を開催（室﨑代表、榛木理事、中川理事、吉椿、立部）
1/17	震災 26 年
1/18-	神戸工科高校で講義（立部）（計 4 日間）
1/19	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
1/21	未来基金「世界のステイホームから～高校生インターンの経験」を開催 （西村葵さん、宮本副代表理事、村井理事、西海理事、吉椿、立部）
1/22	西播磨文化会館「ゆうゆう学園」で講演（吉椿）
1/30	近畿弁護士連合会災害対策連続講座第 9 回「コロナ禍における災害の知恵」で講演（吉椿）
2/1	コープこうべ第 3 地区本部平和企画委員会「震災からときを経て」で講演（吉椿） 震災 26 年企画「ポストコロナに向けて、『いま』、1.17 とどう向き合うか？」を開催 （室﨑代表、宮本副代表、村井理事、西海理事、松田理事、中川理事、岸本理事、吉椿、立部）
2/3	第 4 回兵庫・国際協力同志の会（HYOMIC）で講演（吉椿）
2/8-	葺合高校で講義（吉椿、立部）（各 2 日間）
2/15	HAPIC（JANIC 主催）シンポジウムで登壇（吉椿）
今後の予定	
2/28	大学コンソーシアムひょうご神戸「コロナと防災」で講演（柳瀬さん、吉椿）
3/6	コープこうべ第 3 地区本部平和企画委員会「震災からときを経て」で講演（柳瀬さん、吉椿）
3/9	国際協力こころざしトーク（金沢の NGO,TLAG 主催）で講演（吉椿）
3/13-14	未来基金農業フィールドワークで奥丹波を訪問（柳瀬さん、原田さん、山村さん、立部、吉椿）
3/16	関西国際大学「ACP INTERNATIONAL VIRTUL BOOTCAMP2021」で講演（吉椿）

会員・寄付者 ご芳名（50 音順、敬称略）2020/9/5~2021/2/21

【会費】

池見宏子、鵜飼卓、大津暢人、語り部地蔵 阪本美津江、岸下正純、坂戸勝、師玉健男、芹田健太郎、空野仁志、竹内由美、田中一正、田辺エツ、旦保立子、中里一実、中村大蔵、飛田雄一、兵頭晴喜、水平企、宮崎洋介、村田昌彦、茂幾保代、山添令子、山本健一、山本佳子、山本良治、湯原武彦、

【ご寄付】

相川康子、青石繁吉、池見宏子、石橋裕子、石本賢司、伊勢正、市川泰之、市橋純子、井出賢、稲垣信一、岩井雅之、宇田川規夫、遠藤民子、大重めぐみ、大塚俊平、岡本誠、置塩ひかる、尾崎礼子、門屋光、金澤諒平、鎌倉千俊、亀田彩子、カワグチユイコ、河崎紀子、河村紀子、神田三郎、岸本くるみ、北浦和志、木下八重子、木村理恵、黒朱美、古賀知子、古里洋子、小島路生、小林アイ子、小吹岳志、米谷啓和、斉藤茂樹、斉藤容子、坂手節子、坂戸勝、佐竹一純、師玉健男、白鳥孝太、白水士郎、管義正、住野和子、瀬木志央、空野仁志、高井喜久治、高橋大希、高橋美和子、竹内希代子、竹内由美、竹尾祐子、田中一正、田中ここみ、田中純一、田中めぐみ、田辺エツ、玉岡昇二、檀上詠子、塚本謙三、土屋芳久、鳥坪悦幸、中井裕子、中川寿子、中須雅治、永松伸吾、羽島新菜、畑正夫、パナソニックエナジー労働組合、浜口和子、林ひさ子、林英子、原田真太朗、榛木恵子、兵頭晴喜、藤田靭音、藤本範子、藤原紀子、前田実麻、増田末知子、三浦進、三浦真里子、水野明代、水平企、三宅保昌、宮崎洋介、村田昌彦、室﨑益輝、目黒和子、茂幾保代、八尾高伸、山崎清、山添令子、山風呂恵子、山本健一、山本博子、山本佳子、山本良治、柚原里香、吉椿紘、吉椿琴、吉椿雅道、吉永孝代、李フシン、亘佐和子、匿名（消印大阪北）

— CODE Supporter's Voice —

竹内由美さんより

コープこうべの河崎さんに連れられて参加した「食と国際協力」。CODE の独特の雰囲気に圧倒されながら、無言で座っていたことを覚えています。語り手の興味深い話や、珍しい（もちろんとても美味しい）お料理にどんどん心が惹かれ、いつしか CODE は私にとって大切な居場所になっていました。

災害に関心を持ち、ボランティアに踏み出せるようになったのも CODE とのご縁のおかげと心から感謝しています。

2020 年度から開催される「○○×国際協力」を楽しみにしていた矢先のコロナ禍。なかなか思うように動けない上、オンラインでの参加が少々苦手。でも、たとえ自ら動けなくても CODE を応援することが何かしらの力になることを願って、これからも応援し続けていきます。

竹内さん、いつもありがとうございます！

編 集 後 記

近畿ろうきんさんとコラボで開催した 3 回シリーズ「コロナとこれからの市民社会に向けて」、そして震災 26 年企画「ポストコロナに向けて、『いま』、1.17 とどう向き合うか？」と、様々な方とコロナ禍の課題を議論しながら、改めて私たちは、いまこそ 1.17 と向き合わなければいけないということを確認しました。海外の被災地に駆けつけることがまだまだ難しい状況ですが、その中でも CODE にできること、やらなければいけないことは何なのかが問われています。

震災 26 年企画での議論を受け、2021 年度は数回シリーズで引き続き「コロナ」や「1.17」の経験から深堀りしていく企画を開催する予定です。阪神・淡路大震災を経験した方々だけではなく、今の被災地で活動している方、これから活動したいという方など、様々な方と経験を共有し、「ポストコロナ」に向けて私たちが何をすべきか考える場にできればと思っています。多様な方との多様な議論から、ことばを紡ぎだしていきたいと思います。ぜひご参加ください。（立部）

Special thanks: 岸本くるみ（イラスト）

ご協力のお願い

みなさまからの応援があって、CODE は活動を継続できます。
お家から世界へ。　CODE が支援のお気持ちを届けて、世界とあなたをつなぎます。

寄付して応援

活動を継続するためのご寄付です。
全体運営、特定の救援プロジェクトへのご寄付の指定も可能です。
25% を上限に管理運営費とさせていただきます。

ボランティアとして応援

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などの
ボランティアを募集しています。
詳しくは CODE 事務局までお問合せください！

知って・学んで応援

あなたの住んでいる地域で開催される講演会に
CODE スタッフを講師として派遣します。
テーマ・内容等、お気軽に事務局までご相談ください！

サポート会員になって応援

【正会員（総会での議決権あり）】
個人・学生　：年会費　5,000 円 x 1 口以上
NPO/NGO　：年会費　5,000 円 x 1 口以上
企業・団体　：年会費 30,000 円 x 1 口以上

【賛助会員】
個人・学生　：年会費　2,000 円 x 1 口以上
NPO/NGO　：年会費　2,000 円 x 1 口以上
企業・団体　：年会費 10,000 円 x 1 口以上

ともに CODE を創ってくださる方を
いつも募集しています

お振込み方法

■ ゆうちょ銀行
支店名 : 〇九九（ゼロキュウキュウ）
支店番号 : 099
口座番号 : 0330579（当座）
口座名義 : CODE

■ 近畿労働金庫
支店名 : 神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE 海外災害援助市民センター

【郵便振替】
加入者名 : CODE
口座記号番号 : 00930-0-330579

【クレジットカード】
CODE のホームページより　⇒
http://www.code-jp.org/cooperation/index.html

※通信欄に使途をご明記ください。（例「新型コロナ」「賛助会員」）

発行元　（特活）CODE 海外災害援助市民センター

〒 652-0801　兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL：078-578-7744　FAX：078-574-0702
E-mail：info@code-jp.org
HP：http://www.code-jp.org/

Facebook　Twitter　Instagram